

ssc

hasegawa shiro



長谷川四郎作品集 第1巻

昭和41年2月1日初版発行

定 価 800 円

著 者 長谷川四郎

発行者 中村 勝哉

装 幀 長谷川元吉

発行所 株式会社 晶文社

東京都千代田区外神田2-1-4

電話 (253) 2093

振替 東京62799

印刷 第一印刷株式会社

製本 橋本製本所

● ©1966<検印廃止>落丁・乱丁本はお取替えいたします



長谷川四郎作品集／
1

ssc

hasegawa shiro

鶴

7—張徳義

25—鶴

50—ガラ・ブルセンツォワ

76—脱走兵

111—可小農園主人

138—選択の自由

153—赤い岩



シベリヤ物語

シルカ——165

馬の微笑——178

小さな礼拝堂——194

舞踏会——207

人さまざま——220

掃除人——237

アンナ・ガールキナ——252

ラドシュキン——267

ナスンボ——281

勲章——292

犬殺し——325

●本巻には「鶴」と
「シベリヤ物語」をいれた。
前者は1953年、みすず書房刊。
後者は1952年、筑摩書房刊。
前者のほうがあとに出たものだが、
本巻においては、
書かれている事柄の
歴史的順序にしたがい、
あとの「鶴」が
さきになった。
1954年には
前記二冊の
補遺的短篇集ともいうべき
「赤い岩」（みすず書房刊）が出たが、
その中より
「赤い岩」を「鶴」に、
また、「ナスンボ」「シルカ」「掃除人」を
「シベリヤ物語」にいれて、
「客」と「二つの姿」は
どこにもいれなかった。
その理由は、
他のものが
もはや
書きなおし不可能であるのにたいし、
この二つは
それがどうやら
可能であり、
ハンカ棒にひっかけると、
なんとか形を変えて、
少しは
ましなものになりそうな
気がしたからである。

作者

鶴

ハイラル河のその地点に橋が一つかかっていた。それは随分貧弱なものであったが、乾草を積んだ馬車くらいだったら、何台通ってもびくともしなかった。ところが、ある年の夏、一群の日本兵が二台のトラックに乗って到着し、付近に野営して、その橋をすっかり壊してしまった。人口まばらで、広広と平らなこの地方では、この噂は馬上の人によって伝えられた。そして、その橋へ近づきつつあった人人は、いま来た路を引き返したのである。するとまた新しい噂が追いかけて来た、——日本兵は前よりも立派な橋

を作って、何処かへ立ち去って行ったというのだ。そこで人人はふたたび橋へ近づいて行つた。なるほど、すでに遠方から晩夏の太陽に輝いて、白い真新しい太い材木で出来た橋が見えていた。人人は足をはやめた。

しかし近づくにつれて橋の傍にそびえている岩の上に、一人の人間が立っているのが見えて来た。さらに近づく、その人間が銃剣を持っているのが見えた。そして更に近づく、その人間が銃口をこちらへ向けるのが見えてきた。恐れをなして引き返そうとすると、岩の下に作られた小屋の中から、もう一人の人間が、これまた銃剣をかまえて出現し、無気味に早い歩き方で真直ぐこちらへ近づいて来た。そして聞いたことのない声が、聞いたことのない言葉を言うのが聞えた。

——通行証を見せろ。

誰一人として通行証を持っているものはいなかった。それのみか、通行証とは何かも理解しかねた。一体、何処で、何者が、いかにして、いかなる権威で、その通行証なるものを与えるのか、さっぱり判らなかつた。ただ一つ判つたこと——それはこの橋を渡ることはどうやら死を意味するらしいということであつた。そして、それで十分だつた。何故というに、それは決して人を通さないために架けられた橋だつたからである。

そこで、この橋をめぐり、広い地域にわたつて、交通は途絶えた。その付近には人の話声も馬の足音も聞かれなくなつた。河は音もなく橋の下を流れ、冬になると完全に凍りついて、更に音もなく静かになつた。ただ岩の上をのほつたり、おりたりするマリオネットのような兵隊の姿が小さく見られた。彼らは交代で一人一人岩の上に立ち、周囲の野原をへいげいしていたが、そこには人影一つ現われなかつた。土地の人々はもう決してこの橋に近づかなかつたからである。ただ月に一度、二里ばかり離れた部落に駐屯している中隊から糧秣を積んだ馬車が到着した。その時、岩上の兵隊はすでに遠くから早くもその姿をみとめ、いそいで警報用の針金を引っ張つた。すると岩下の小屋の中におら下つている空罐ががらがらと鳴つて、糧秣の接近を伝えたのである。これ以外に、この警報の発せられることは

絶えて無かつた。それは恰も自分の食料の到着を見守るために作られた監視哨のように思われた。

けれども、本部の将校たちがひそひそと話したところによると、この橋は戦略上非常に重要な地点を占めており、そこを通過して、戦車の大部隊が敵の方へ向つて突進することになつていたのである。それはただそのために架けられた橋だつた。

五月のある日だつた。草はまだ枯れていて、吹く風は冷たかつたが、日中の太陽はもうすっかり暖かだつた。低い柳の木立が方々に群をなして生えていて、ゆるやかに起伏し、ところどころあらわれた砂地の上には夜の狼の足跡がかすかに残っているだけで、人気がなく荒涼とした、河沿いの野原を通過して、一人の男がその橋の方に向つて歩いてゐた。その男はぼろぼろの綿入れの短い青い中国服を着て、同じくぼろの青い綿入れズボンをつけ、日本式の黒い地下足袋をはき、灰色の風呂敷包みを帯のように腰にまきつけて、頭には厚いフェルトの焦茶色の縁無帽をかぶつてゐた。彼は下の方を向いてすたすたと歩いてゐたが、ときおり立ち止まつては、うしろを振り返つてみた。その様子はあたかもこの単調な風景の中をどれくらい進んで来たか、目測しているように見えた。それから彼は河の面を見たが、それは彼の進む方向とは反対の方へ、静かにところど

ころ渦巻いて深深と流れていた。しかし、広大な空間はさらにもっと深深と静かだったので、流水が岸辺の砂地を少しずつけずるようにこすってゆく微かな音と、たまたま水中に落下する小石の音が一つ聞えただけだった。男はまた歩き出したが、その足は必ず草の上を踏んで行った。彼は砂地の前に来ると、まるで自分の足跡をのこすのを恐れるかのように、それを迂廻して行った。彼はすでに遠くの方から白い橋の存在に気づいていたが、それ以来ほとんどただ足もとを見ながら進んで行った。何故なら河に沿って進むかぎり、必ずやその橋に到着することは確実だったからである。それで橋が非常に近づいた時も、彼はそのそばの岩の上に立っている兵隊の姿に気づかなかった。さらに、その兵隊が銃をかまえたことにも気づかなかった。彼はただ銃声を耳にして、初めて停止したのだった。兵隊は本来ならば、ただ下の小屋に警報を伝えるべきで、発射すべきではなかったのだが、突然、あまりにも橋に接近している見知らぬ男の姿に気づき、おどろいて非常の手段を取ったのだった。兵隊はその男に狙いを定めなかったのか、それとも、狙ったけれども目的をはずれたのか、ともかく、弾丸は彼に当らなかつた。彼はただ頭上の空気をかすめて過ぎた鋭い音を聞いた。兵隊の方では、これによって、その男が身をひるがえし、一目散に逃げ帰るであろうと期待し

た。ところが、一瞬停止したその男はたちまち突進を開始し、死物狂いの勢いで一気に橋を渡って行った。同時に、今の銃声を聞いて、小屋の中から数名の男がとび出して来た。その中の隊長とおぼしき一人が銃をかまえて狙いを定めた。彼は狐射ちの名手だった。しかし逃げる人影はすでに小さく、この距離で、素早く動く物体を射止めることは難しかった。それでも彼は引金を引いたが、はたして当らなかった。一瞬、男は無事に逃げのびるかと思われた。その時、一人の兵隊が元気のいい白い小さな蒙古馬に乗って、ギャロップで彼を追いかけた。男はもう橋を渡り、柳の木立の間を走っていたが、息が切れて立ち止まり、背後から橋板をひびかせてかけて来る蹄の音を聞いた。彼は観念したように振り向いて、その場に膝をついた。こうして捕まった彼——張徳義は岩の下にある半地下室の小屋につれて来られた。

2

北京の町に初めて電車が通った時、張徳義はまだ少年だったが、車夫たちの示威運動に参加して、レールの上に寝

たのだった。彼はもともと百姓だったが、土地も農具も持たない彼は村では食えず、北京に出て車引きになっていたのだ。彼は人を乗せたり、或いは空車を引つ張ったりして、北京のあらゆる街や路地を何年も歩きまわった。それは彼には果しもなく長い一筋の足跡路のように思われた。それから父親が死んだので、また村に帰った彼は、同じく張という姓の大きな農家の雑役夫として働き、父親のあとをついで、母親を養っていた。人人は、真夏の炎天下で、彼が一日中、張家の井戸水を汲みあげて、それを張家の畑にそそいでいるのを見た。また秋には張家の穀物を張家の麻袋に入れ、それを張家の馬車に積んで、町へ運んでゆく彼の姿が見られた。こうして年年は過ぎ、彼は既に結婚して、息子が一人生れていた。そして、ある年の冬、彼は粗末な板で棺を作り、中に母親を入れて、張家の馬車を借り、泣きながら村はずれの墓地へ埋めに行った。それから彼は妻と息子を村にのこして、また北京に出て来たのだ。それと、それというの、その頃、北京の町にはたくさん日本人が入りこんで、さかんに車を乗り廻していたからである。彼は彼自身の父親のように、自分の息子を北京に出そうとしたのだが、この息子はどうしても母親の傍から離れたがらなかった。で、自ら北京に出てふたたび車引きになった彼は、瀛環飯店といういかめしい名前の、ろくでも

ないホテルの前にたむろして、そのホテルに泊っている日本人が門から出て来るたびに、沢山の競争相手と一しょにわれさきにとかけ寄って、車をその人の足もとにすえて、「車でいこう！」と叫んだものだったが、これが彼のおぼえこんだ唯一の日本語だった。日本人はたいいてい、彼を無視して、見向きもせずに通り過ぎたが、何回かに一度は彼も成功して日本人を車に乗せ、日本人のカフェーに引つ張って行った。こうして彼の隠しポケットには少しずつ金が増えていった。ある時、空車を引きずって夜の裏町を瀛環飯店の方へ帰って来る途中、突如、闇の中から彼は呼び止められた。彼が立ち止まると、もうその人物は車に乗っていた。それは日本刀やらピストルやら図ノウやら双眼鏡やらいろんな物を到るところにぶら下げてやたらと重たい人物だった。彼はこの怪物を背後に引きずって、暗い路地をいくつも通りぬけ、やつのことで一軒の家の前に辿りついた。その家は電燈でまばゆいばかり輝いており、彼はそれを遊廓だと思ったが、じつはそれは軍人会館というものだった。ところで目的地に到着すると、その重たい人物はいきなり抜刀して彼を追い払い、一銭も金を支払わなかった。それどころか、彼の車はうしろから日本刀でばさりと切りつけられ、幌が骨もろとも大きく裂けてしまった。そのため彼は車屋の親分から賠償金として、貯めた金をそっ

くり捲きあげられた。

その頃、北京の町の壁々には労働者募集の大きなビラが方々に貼り出されていて、それには満洲労働会という署名がしてあった。張徳義は字が読めなかったが、通りすがりの親切な人がその説明をして、いろいろと彼によいことを囁いてくれた。それからやがて張徳義の姿は瀾環飯店の前から消えてしまった。彼は汽車に乗って、故郷の方へではなく、北の方へ、沢山の見知らぬ仲間たちといっしょに長城外へ、関外へ、満洲へ運ばれていった。

張徳義は手紙を書かなかったが、村に残して来た妻と息子のことをいつでも考えていた。彼らはこれまた張家のものである納屋のような一室に住んでいて、息子は彼と同じように、また彼の父親と同じように、春には張家の畑を起こし、夏には張家の井戸水を汲み、秋には張家の麦を刈り入れて、冬には張家の馬車をひき、こうして母親を養っていたが、この女は病身で蒼い顔をしており、ふらふらして、張家の広い院子を掃除するのが精一杯だった。ほんとういうと、彼女の病名は慢性の栄養失調だったのだ。

張徳義はこの二人の肉親のためそこばくの金銭を持って、新年までには村に帰り、豚肉の入った正月の団子を二人に食べさせようという、ささやかな希望を抱いて北京に出て、更に満洲まで出稼ぎに来たのだった。彼は三昼夜も

汽車で運ばれ、ジャラントンという町で下ろされた。そこには沢山の苦力たちがボロをまとい、シラミだらけになって、有金をバクチにうちこんでいた。なぜというに、この町から更に奥地へ入ってゆくには、特別の許可証が必要であり、それを持たない不運な労働者たちはみんなここで下ろされたからである。だが張徳義は満洲労働会発行の、その許可証なるものを持っていたので、そこからほとんど自動的にプハトの町へ送られ、興安嶺の伐採苦力となって、さらに貨車で山中の小さな部落へ運ばれて行ったのである。長い汽車旅の後、彼がぼんやりと見たものは、夕空の中にくろくろと大きく積み上げられた丸太であり、その上にそびえている回教徒寺院の黒い三日月だった。翌朝、彼は馬車で伐採の現場へ向って出発したが、部落を出はすれぬ時、彼は一頭の黒い馬が死んでいるのを見た。そして髻だらけの異様な人物がその馬の皮を剥ぎ、耳を切り取っているのを見た。

馬車は折れ曲った谷間を長いこと進んでゆき、終に山の澄んだ空気の中に微かに糞便の匂いがただよって来て、山影から一軒のバラックが現われた。それが伐採苦力の小屋だった。張徳義はその小屋の中央に大きなカマドがあり、そこでコーリヤンの飯がたかれているのを見て、何となく安心したのだった。彼はその飯を食い、そして前からいる

連中と尻をならべて戸外に排泄しつつ、早くもこの新しい生活の中に入ってしまった。こうして彼は大きな樹木を何本も切り倒したが、一向に金はたまらなかつた。なぜなら彼の夢みた賃銀が彼の手に入るまでに、彼は前もってそれを食べてしまうように仕組まれていたからだ。腹の減った彼ががつと食ってまだ足りないそのコーリヤンメンが、彼の賃銀をほとんど食ってしまったのだ。おまけに旅費だとか被服費だとか、そのほか何だか彼にはわけのわからぬものが差引かれて、彼の手に入る時は、それは煙草錢くらいのものであった。彼は一番安い葉煙草を少ししかのまなかつた。

一季節働いてプハトの町に下りて来た時、彼はそれでも少しばかりの金を握っていた。プハトの町は中央に一筋の小川が流れており、片側は小高い岡になって、そこには坂道がついていたが、片側は平地で、そこについている道路を歩いてゆくと、直ぐ野原に突きぬけて、野原のむこうには山がすぐ迫って見えた。苦力たちが山から下りて来るころを見計って、そういう道路のまん中に芝居やら手品の興行がかかっている、それにはまたしても満洲労働会主催という看板が出ており、その前にはいろんな飲食物の屋台店が立ちならんでいた。そこで張徳義は一杯の酒を飲みながら金を勘定してみた。そしてそれがどうやら北京まで帰れ

ばかつたのであることを知ったのである。彼はその時、手品小屋の幕があげられて、中で一人の男が口をあんぐりあけて、腹の中から無限に長いはらわたのようなリボンを取ら次へと取り出すのを、ちらりと見た。彼は長いこと考えこんで、それから立ち上った時、決心していた、——たんジャラントンへ引返し、そこから改めて興安嶺を越えて、ジャライノールの炭坑へ入ろうと決心したのである。

張徳義は四十歳を越え、瘦せて骨ばってはいしたが、頑丈な体格で、全身にわたって針金のように丈夫な筋が張りめぐらされていた。彼はいかなる労働にもたえることができ、労働以外に彼の生活はなかつた。それはすなわち車をひくことであり、百キロからある麻袋マコイを担いで運ぶことであり、大木を切り倒すことであり畑を起こすことであり、草を刈ることであり、道路の溝を掘ることであり、石を積み上げて塀を築くことであった。彼が休息している時は、その皮膚はなめらかだったが、何か力を入れて働き出すと、見る見るうちに肉体から筋肉がむくむくと現われるのだった。またひき綱を肩にかけて何か重い物を引いている時の彼は、その手をゆっくりと重そうに、時計の振子のようには振っていて、それが無言の美しい拍子を取っていた。ジャライノールの炭坑に入って積込夫になった彼は、今まで従事したあらゆる労働とべつに異なることなく、自分の身

体を巧みに使って、無駄な動作一つなく、やっつてのけた。彼は労働を辛いとは思ったが、労働自体については何も不平を言わなかった。ただ彼は自分の労働によって、自分の身体一つしか養うことのできないのが、大きな苦悩だったのである。「わしはここで飯を食っている、家族はむこうで腹が減っている」と彼は口癖のように言っただけだ。おお、彼自身だって少ししか食っていなかったのだ。そして、しまいに彼は彼は家族の人々が村のあの薄暗い部屋の中で餓死したのではないかと思ひ、大きな不安にかられた。しかし誰一人として、彼のこの当然の不安について考えてくれるものはいなかった。もっとも、ずっと上の方で、人が不安の哲学を談じてはいた。

ところで、ジャライノールの炭坑は入る足跡はあるが出た足跡の見当らないイソップの洞穴に似ていた。中に怪物がいて、入って来た者を食べてしまったわけではないが、いったん中に入ると、なかなか出られなかった。出入口は何処か人知れぬところにあいていたのだ。多くの人人は入ってからこのことに気づくのだったが、張徳義もそうだった。つまり彼には情報というよりも、あの狐の用心深い知恵がなかったわけである。いや、そんな知恵が何になつたろう？ 彼は何か抵抗し難い生活の重力にひかれて、そこに落ちこんだのだ。丁度、泳いでいる者が渦巻にまきこまれ

るように。そして万事そうだったが、ここでも彼はだんだんと失望したのである。あの伐採地では彼は少くとも故郷へ手ぶらで帰ることができた。それが、お土産を持って行こうと彼の望んで入ったこの炭坑では、彼は囚人のように柵でかこまれてゐるのに気づいた。そして彼の賃銀は彼の手に流れて来るまでに、何処か上の方にひっかかつて積み重なり、そこへはいつまで経っても彼の手は届きそうになかったのである。彼は周囲を見まわしてみ、逃亡以外の出口はないことを知った。それから夜、夢の中で彼は一筋の道が自分の前にひらけるのを見た。それはかつて、彼が母親の棺を運んでいった道路に似ていた。それは村を出はずれてから、遠く岡のふもとをまがって消えていた。

ある晩、発電所の事故で電流がとまり、炭坑の車道は真暗になった。その時、張徳義は自分の持っている安全ランプを吹き消したのである。そして坑道の壁に沿って身をかくしながら地上に這い出した。彼は明りといえば空一面に光っている星星を感じながら、自分の名前の書いてある作業服を脱ぎ捨てた。それから夜の中を腹ばいになって進んでいったが、その時、遠く門柱の電灯がふたたびともるのが見えた。が、幸い、彼の周囲は暗かった。彼はトゲのある針金の下をくぐって、ようやく道路に出た。そこで彼は一瞬、溝の中に身をひそめて耳をそば立て、それから立ち

上つて足早に歩き出した。その時、行手の薄暗い街灯の光に照らされて、大小さまざまな数匹の犬が道路上に現われるのを見たが、彼らは一匹の牝犬を追っていて、彼には気づかずに、そのまま道路を横切つて行つた。

夜ふけて、ジャライノールの町は暗く、家は板戸を立てていて、戸のすきまからは明りがもれ、内部では人人はまだ眼を覚ましている。彼は二三軒の店の戸を叩いて、ありたけの金を出して、とうもろこしの粉で作つた饅頭を買ひこみ、それを腰につけた。それから彼はほとんど方向も定めないで、走るように進んでゆくと見えたが、それはけつて方向を誤つてはいなかった。彼には多くの中国の農民におけるごとく、方角に対する本能的に鋭い感覚がなくなつていた。広漠たる平原と興安嶺の山脈を越えて、どこにあのジャラントンの町があるかを、彼はちゃんと知つていたので。彼にはジャラントンの町が分水嶺のように思われた。そこまで行けば、初めて遠く北京の町を望み見ることができようであらう。ただ彼はジャラントンの町と自分との間に何が横たわっているかを知らなかったただけである。

町を逃れ出た彼は、或いは岡にそい、或いは岡をこえて、真暗な道らしきものを長いことたどつて行つた。一度、彼は前方から車をききませて来る一台の馬車に気づ

き、道ばたに身を伏せた。馬車には二人の男が乗つていて、彼の知らない言葉で何やらぼそぼそ話しながら通り過ぎて行つた。一度、彼は岡の上に立つて、遠く夜の地平線に近く、彼と平行して汽車の明りらしきものが通つてゆくのを見た。それから彼は道のあるなしにかかわらず、まっすぐ岡を下つたり上つたりして進んで行つた。起伏はゆるやかで、樹木は一本もなく、足にふれるものは草ばかりで歩きやすかつた。こうして夜明けと共に彼は荒涼たる原野の中へ歩いてゆく自分を見出したのである。そこには柳の木立がところどころにかたまつて生えているだけで、人家は一つも見えず、人つ子一人いなかった。砂地特有の非常に粗い固い草がまだ枯れて地面をまばらにおうていた。振りかえつて見ると、夜の間に彼のこえて来たあの岡の起伏が横たわつていて、それが遠くジャライノールの町を彼からへだてていた。こうして背後の脅威がうすれると共に、彼は前途の不安が生長するのを感じた。それはまことに広漠たるものだった。その時、前方に當つて大きな河が朝日にきらきらと輝いて、横に流れているのを見たのである。必然に彼はそれにそつてさかのぼつて行つた。そして、五月の太陽が彼の影を砂地に落し、それがもう正午過ぎを示している頃、初めて饅頭を一つ取り出して食べながら、遠くの方に、白い木の橋が日光を浴びて現われるのを、彼は

見た……。

3

今や橋梁監視哨のウマヤの中に張徳義は住んでいた、と言わんよりも、陸軍主計中尉の言葉をかりて、彼は馬といっしょに飼われていたと言うべきであろうか。彼の飼料は、一日に罐詰の空罐一杯分のコーリヤンと、ミガキニン一匹だった。

彼は橋のわなに引っかかってとらえられるとすぐに、猛烈に殴打されて、それから暗い狭い倉庫の中におちこまれたのだったが、そこには乾草が沢山入れてあったので、その上に二日間、彼は身を横たえていた。一方、この二日間に、そこから二里ほど離れた中隊本部の事務室では、彼の運命に係のある、ささやかな論争が行われていた。副官は、逃亡した苦力などはその場に殺してしまえと主張した。それも背中に油を塗り、それに火をつけて焼き殺したらよからうと言ったのである。この兵隊あがりの副官に対して、大学卒業のインテリである主計は武士の情を説いた。と言うのは、彼は中隊の自給農場なるものを計画して

おり、その耕作用として苦力を生かしておいた方が得策であると考えたからだった。ちなみに、この論争は二日間にわたり、飯を食いながら、ソロバンをはじきながら、事務を取りながら、週番下士官の報告を受けながら、事のついでに、談笑のうちに行われたのである。終に主計の意見が勝った。何故なら副官は武士の情を認めるのにやぶさかできなかったからである。彼はただ自分の秋霜烈日たる意見を二日間楽しただけで満足した。一方、中隊長はこの二日間に、部落民の牛が兵營の構内に入ってきたので、それをウマヤにかくして、ひそかに屠殺するべく準備していた。張徳義の一件よりも、この方が彼には重大だったのだ。なぜなら、牛はビフテキにして食べるからである。

さて、その時、かなた、暗い倉庫の中では乾草は日光の匂いがして暖く、張徳義には大へん気持がよかった。それは彼に、子供の時、張家のウマヤの中で寝たことを思い出させた。この二日間、彼は生れて初めてゆっくりと休息し、持ってきた逃亡用の食料を食べつくしてしまった。彼は満腹すると眠り、そして眼を覚ますと、もう腹が減っているのを感じた。だが、もう食べるものがなかったのだ、彼は闇の中で膝をかかえて長いことじっとしており、終にはそのまま横に倒れて、またぐつすりとして寝込んでしまった。ふたたび眼をさました時、あたりはあいかわらず暗かつ